

## 国際理解教育科目としての JATIS2015

—その意義と課題—

市川 顕  
山本 竜大

### 1 : はじめに

国際理解教育に対する要請が、大学教育においても高まりを見せている。国際理解教育については、ユネスコによる「74年勧告」で、各学校教育において世界的視点を持たせ、自・他文化の価値観や生活様式に対する理解を求めたことに端を発する<sup>1)</sup>。わが国でも1982年に国際理解教育の構造化が試みられ、国際協調・協力の態度を育成することが目標として掲げられた<sup>2)</sup>。1987年には教育審議会答申において「教育の国際化」という用語が盛り込まれ、1989年の学習指導要領から「国際理解教育」が学校カリキュラムに組み込まれた<sup>3)</sup>。2006年には文部科学省（以下、文科省）の国際戦略検討会が「文部科学省における国際戦略（提言）」をまとめ、国際理解教育と学生の国際競争力が結び付けられるに至り<sup>4)</sup>、2008年の新学習指導要領では小学校段階からの外国語活動が改定の柱となった<sup>5)</sup>。

このようにわが国の国際理解教育は多様な価値観を理解するという文脈から、国際社会で競争力のある人的資源を育成するという文脈まで幅広く把握されている。しかし、国際理解教育の本質が

「態度化」であることは言うまでもない。ここでいう「態度化」とは、「学習を通じて獲得した知識・理解、観察・資料活用の技能、社会的な思考力・判断力等をもとに、あるべき社会の発展に向けて自らの価値観を変革し、社会に主体的にかかわっていかうとする行動がとれるようになること」<sup>6)</sup>であり、国際理解教育とはまさに、外国人とのコミュニケーションを通じて「異文化など異質なものを理解すること」と「多様な文化や価値観・生き方をもった人々と歩み寄りながら共に生きていくこと」が統一して獲得される<sup>7)</sup>べき教育的実践活動であるといえる。

このような国際理解教育を大学が提供することには、どのような意味があるのか。植木は、学生にとって「大学時代が思索を深めるに最適な心理的成長期であること」を挙げ、「授業その他のあらゆる機会を逃さず、問いかけ施行させるプログラムを推進していかなければならない」とする<sup>8)</sup>。そして、そのためには大学生は国際理解教育科目を通じて二つの変化（動機づけ）を経験することが望まれる。一つは内的変化であり、国際教育科目を通じて自己成長・自己発見・自信の獲得をお

1) 植木 (2013), p.194.

2) 植木 (2013), p.193.

3) 藤原ほか (2011), p.47.

4) 中野ほか (2008), p.31.

5) 藤原ほか (2011), p.47.

6) 青木・竹内 (2011), p.117.

7) 青木・竹内 (2011), p.117.

8) 植木 (2013), p.200.

こなうだけでなく、自ら英語力の向上や学習の必要を感じるものである<sup>9)</sup>。もう一つは外的変化であり、国際教育プログラムを通じてメールの書き方、ミーティングの進め方、議事録の書き方など社会人として必要な実務能力を身につけていくものである<sup>10)</sup>。このように、大学教育における国際理解教育科目の実施においては、多様で幅広い技能や知識を射程に置く必要がある。

しかし現実的には、国際理解教育科目については、誤解も散見される。田所らは「国際交流はどうしても教育・研究の範疇から外れた「遊び」としてとらえられる節がある」<sup>11)</sup>と述べるし、細谷らは、国際交流は「珍しさや楽しさを求めるものではない」<sup>12)</sup>と釘を刺す。

また、国際理解教育科目の履修を通じて、参加学生には、キャリア意識の向上<sup>13)</sup>、内向き思考の打破<sup>14)</sup>、次なる国際プログラムへの挑戦<sup>15)</sup>、そしてより広い意味ではグローバルな視野の獲得<sup>16)</sup>が求められる。はたして、このような教育効果は国際理解科目としての国際セミナーで獲得できるのか。できるとすれば、どのような工夫が必要なのか。さらに、どのようなプロセスを通じて、学生は内的変化と外的変化を経験するのだろうか。

そこで、本稿では関西学院大学（以下：本学）で実施された国際理解教育科目であるトルコ交流セミナー（Japan and Turkey Inter-Cultural Seminar：以下 JATIS）に焦点を当てたい。ここでの目的は大きく分けて二つある。一つは、2015年8月27日から9月5日にかけて、ムラト・ヒュダヴェンディガル大学（トルコ／以下 MHU）の学生4名（引率者の Ph.D. Candidate1 名を含む）と本学学生11名が参加して、本学にて開催された JATIS2015 について、その意義と課題を明確化させることである。

二つ目は、JATIS 準備期間中およびセミナー最

終日に本学参加学生からとったアンケートの結果をもとに、JATIS2015 が本学参加学生にとってどのような影響を与えたのかを分析することである。特に、本学参加学生の異文化理解、内的・外的変化、次なるステップへの挑戦、といった点に焦点を当て、「学生の国際化」について検討したい。

筆者らは、これまでも過年度に開催された JATIS の意義と課題を検討した論文を発表してきた。その一つは、市川ら（2015）である。当論文では、日本開催の JATIS2013 における参加学生の「国際化の自己認識」が向上したことを定性・定量の両側面から実証し、本学が提供する国際プログラムの中でも、JATIS が「第一段階」のプログラムであり、ある意味で「Open Eyes（世界市民としての次のステップを目指すために、まずは「目を開く」こと）」のためのプログラムとしての意義が認められると結論した。

もう一つの論文は、市川ら（2016）である。当論文で扱った JATIS2014 は本来トルコでの開催予定であったが、2015年2月初頭の ISIL による日本人人質殺害事件を受け、渡航直前で中止の憂き目を見た。しかしながら、準備を入念にしてきた本学参加学生（有志）と教職員は、国内代替プログラムとして、インターネットを通じたトルコ・コジャエリ大学の学生との交流や、日本国内におけるトルコの要素の発見のためのフィールドワークなどを通じて、異文化理解に努めた。このような困難な状況での国内代替プログラムとなったが、定性・定量の両側面から分析したところ、JATIS2014 参加学生の「国際化の自己認識」は向上し、とくに身近なコミュニティからグローバル化を考える、国内の情報を積極的に海外に発信する、国際交流活動を目的のための手段として捉えるのではなく、それそのものの価値を見出していく、といった心境の変化が学生に見られた。

9) 田所・渡部（2013），p.9. および坂本ほか（2006），p.9.

10) 田所・渡部（2013），p.10.

11) 田所・渡部（2013），p.12.

12) 細谷ほか（2003），p.137.

13) 稲葉（2012），p.26.

14) 田所・渡部（2013），p.5.

15) 田所・渡部（2013），p.11.

16) 森ほか（2013），p.491.

筆者らが、JATIS での経験を論文文化してきた背景には、前述の通り日本における大学の「国際化」「グローバル化」に関する社会的要請の増加がある。このような要請を受け、こんにち、多くの大学で国際理解科目としての国際交流セミナーが用意されるようになった。しかし、それらが現実どのような役割や意義を学生に与えているかについて、また、これらの国際交流セミナーの現実の運営の困難や課題については、担当教職員個々の「経験則」として蓄積されてきた傾きが強い。本稿では第3節で JATIS2015 の実施過程の精査を通じてその意義と課題を定性的に分析するとともに、第4節でアンケート結果に基づく参加学生の「国際化」についての定量的分析をおこない、今後の JATIS さらには同様の学内外でのプログラム運営・計画に貢献することを企図している。

## 2：本学における海外留学プログラムと JATIS の位置づけ

本節では、本学における「世界市民」育成の取組みと JATIS の位置づけを確認する。

### 2-1：本学における「世界市民」の育成

本学では、平成23年度大学の世界展開力強化事業として採択された「日加大学協働・世界市民リーダーズ育成プログラム」が実施されている。さらに平成24年度国際化拠点整備事業費補助金「グローバル人材育成推進事業（全学推進型）」において「実践型“世界市民”育成プログラム」構想が採択されている。これらプログラムのもとで、本学の世界に貢献する力を持つ「世界市民」と、文科省がいうところの、日本の国際力を高め他国との絆を強化する「グローバル人材」、その双方の特徴をもつ学生の育成が課題となっている。さらに平成26年度にはスーパーグローバル大学創成支援「グローバル化牽引型」に本学の「国際性豊かな学術交流の母校「グローバル・アカデミック・ポート」の構築」が採択された。ここで学生のグローバル化に関連するところでは、平成35年度までに本学学生の協定校への派遣を年2500人（平成25

年度は895人）に、同じく学生の本学への受け入れを年1500人（平成25年度は913人）にすることなどが盛り込まれている。これら一連の事業を通じて、学生は大学4年間で「世界市民」として社会で活躍するための素地を身につけることが求められている。そのためには、本学教職員は学生に対して、入学後早い時期から世界に目を向け、異文化を理解し、世界で活動することを促していく必要がある。

### 2-2：JATIS 概要

本学では、2010年の『トルコにおける日本年』を契機として、トルコ・コジャエリ大学との間で JATIS を開始した。コジャエリ大学はトルコ最大の都市イスタンブルから車で約1時間半の場所に位置し、1999年に大震災で被災した経験を持つ公立大学である。この大震災を契機として日本の NPO や芸術家と交流があったコジャエリ大学芸術学部が、本学の交流相手となった。一方、本学では全学部の学生を対象に交流を始めた。2010年3月にトルコで初めて JATIS を実施し、同年9月に本学にてコジャエリ大学学生・教員の受入を行った。この際、コジャエリ大学芸術学部長が来日し、プログラムの意義や有用性、普遍性の観点から芸術学部単独のプログラムではなく、全学の学生を対象とすることを確認した。その後、JATIS は毎年一回、日本とトルコで交互に開催されている<sup>17)</sup>。

JATIS ではこれまで、両国の文化や歴史、平和さらには震災等をテーマに両大学の参加学生が発表や議論を行ったり、視察見学や文化交流を行ったりしてきた。JATIS 最大の特徴は、これらの企画を学生達が中心となって運営することである。ホスト国の学生達が主体的にプログラムを運営する中で、両国の学生が言葉や文化の壁を越えて、お互いを理解し、世界市民として羽ばたく契機となることを目標とする。とはいえ JATIS は、本学が提供する国際プログラムの中でも、「第一段階」のプログラムであり、前述したとおり「Open Eyes」のためのプログラムとして位置づけられている。そのため、他のプログラムよりも要求される英語

17) 本学グローバルスタディーズ科目に位置するトルコ交流セミナーは、2012年度より科目化されており、日本開催が「トルコ交流セミナーB」、トルコ開催が「トルコ交流セミナーA」となっている。科目化される前は「日本・トルコ学生交流プログラム」という名称で実施していた。

のスコアは相対的に低く、国際理解教育に挑戦したい本学学生に広く門戸を開いた形となっている。

### 3：JATIS2015の実施過程

本節では、JATIS2015における実際の運営過程を6つの段階に分け、現実を実施したプログラムの内容を確認する。そして、それを通じて発見された当プログラムの意義と課題について提示する。

#### 3-1：JATIS実施時期変更への対応

本稿筆頭著者の市川が前年・前々年に引き続きJATIS2015担当教員となることが決定したのは、2015年1月である。実は2014年12月に、本学国際教育・協力センター長から、他の教員との共同担当での担当教員就任を打診されたが、以下の理由により単独での担当教員就任をお願いした。第一に、共同担当となることでJATIS運営方針について教職員のあいだでの遠慮が生じ、このことが学生に少なからず影響するのではないかと懸念したこと。第二に、参加学生の選考・参加学生への指導には一貫性が必要な場面が多いこと。第三に、教職員での打ち合わせの日程調整などが困難になること。さらには、この共同担当の依頼では「これまでの経験を後任の教員へ伝える」ことが要求されており、これについては純粋に業務量が過多になると判断したことによる<sup>18)</sup>。

その後、トルコへの渡航が中止となって国内代替プログラムに切り替えたJATIS2014の実施を経て、2015年3月からJATIS2015についての本格的な準備が開始された。トルコ実施予定であったJATIS2014が急遽中止となったことを受け、3月上旬にコジャエリ大学は、通常2月に実施してきたJATISの開催時期を夏（8-9月）にすることを要求<sup>19)</sup>。本学は3月17日にそれを承認し、これによりJATIS2015が初の夏開催となることが決定した。

JATISの夏開催については、運営上の懸念があった。それは、JATISが「インドネシア交流セミナー」・「国連セミナー」・「海外フィールドワーク」と時期的に重なることである。これまで、夏（インドネシア／国連／海外FW）と春（トルコ）で、

棲み分けてきた国際交流プログラムがすべて夏に重なることで、参加学生の取り合いの懸念が生じた。また、夏にJATISを実施するためには、春に学生選考をおこなう国際交流プログラムを紹介する冊子にその記載がなければならないが、急遽夏実施が決定したことで冊子に載せることができなかった。これにより、1000枚余のチラシを作成し、冊子に挟み込んだり、春学期開始後すぐの講義で配布したりという、事務的な困難も生じた。

しかし、市川はJATIS担当教員として3年目であり、またプログラム事務職員の松島氏はJATIS担当職員として2年目だったこともあり、国際セミナー運営の経験が備わっていたことで、JATIS実施時期変更による事務的障害は乗り越えることができた。

#### 3-2：参加学生の選考過程

JATIS2015の募集説明会は春学期開始早々の4月7-8日に行われ、4月15-17日が出願期間、4月22日に書類選考の発表、4月25日に面接審査、4月30日に参加学生の発表が行われる予定が組まれた。しかし、上述したJATISの夏開催への変更による影響からか、通常は3-10倍の競争率になるJATISへの応募者は、4月17日時点で10名（定員12名・2名は他セミナー併願）にとどまった。担当職員は4月20-23日の期間で学生の追加募集を行ったが、そこでの応募者はなかった。その後、担当教員は4月25日に10名の面接を実施、全員を合格とした（2名は他セミナーを第一志望としていたので、この時点で8名を確保）。さらに、4月30日から5月7日のあいだで再追加募集の期間を設定し、応募者が来るたびに書類審査・面接審査を行った。このことは、担当職員の作業量を増やしたほか、担当教員もなかなか選考過程が終わらず時間が取られた点で、改善すべき課題である。

さらに、応募人数が定員を下回ったこと以外にも、重要な問題が生じた。それは、4月17日時点での10名の応募者がすべて女子学生であったことである。本学においては、一般的に国際セミナー（とくにホスピタリティが要求される日本開催）へ

18) そもそも、このような依頼があることが、国際交流セミナー運営の「経験則」重視を物語る。大学教員が担当し、単位の付与を行っている科目である国際セミナーの意義や問題点については、論文として蓄積し、常に改善がなされていくべきである。

19) コジャエリ大学国際センター長とのE-mail上のやりとりでは、国際担当副学長の意向だったという。

の参加については女子学生が多い傾向にある。しかし、男子学生の応募が0名であることは想定外であり、トルコから来る男子学生への対応という点も含めると、解決すべき課題として浮上した。

ゴールデン・ウィークを挟んでの再追加募集は一定の効果があった。5月12日に2名、5月13日に1名、5月20日に2名の面接を実施し、全員を合格とし、合計13名でセミナーの開催が実現することとなった。また、5月20日に面接し合格を出した1名は男子であり、これでトルコ人男子学生対応についても一定の目処がついた。

この時点で選抜した13名は以下のとおりである(性別・学部・学年)。A(女・総・1)、B(女・社・3)、C(女・国・1)、D(女・総・1)、E(女・総・2)、F(女・文・1)、G(女・国・1)、H(女・教・1)、I(男・社・1)、J(女・総・1)、K(女・国・1)、L(女・国・2)、M(女・法・2)。このうち、B、E、Iを除いては旅行(修学旅行を含む)以外の海外経験は乏しく、TOEICなどの検定試験の点数も顕著な数字をもつものはいなかった。このことは、セミナーの円滑な実施に不安を残したが、熱意のある学生がそろった。

また、応募人数の少なさから面接した学生全員を合格させたことで、担当教員にもこれまでのJATISとは違った心境が芽生えた。つまり、ある

程度キャリアを積んだ学生とともにセミナーを作り上げるのではなく、一から丁寧に参加学生に対して指導しなければならない、と感じたことである。語学、プレゼンテーションの作法、メールの作法、電話予約などの社会との接点における注意事項<sup>20)</sup>、体調管理、グループワークにおける他メンバーへの気遣い、目上の人への言葉遣い、などから、果ては、講義中・授業中に寝てはならない、学外で活動するときには迷惑なので大きな声を出してはならない、といったことまで、ともすれば家庭教育や高校までの教育において習得すべき内容について、丁寧に指導していかなければならない<sup>21)</sup>という心境である。

### 3-3: セミナー準備過程

上記選抜過程を経て、13名のJATIS2015参加者は、5月13日から水曜日6限に事前研修を開始した。準備過程は、下記のようなスケジュールで行われた。

第1回会合(5月13日):ここでは参加学生の自己紹介のあと、各人がJATIS2015で実施したいと考える企画について、ブレイン・ストーミングを行った。文化体験からフィールド・トリップ、発表・議論に至るまで多くの企画が上がったが、この会合ではそれらを各自が持ち帰り、次回会合までに検討することになった。

表1: JATIS 2015 役割分担表

	Team 1	Team 2	Team 3	Team 4
カテゴリー1 【庶務】	しおり A・C・E	キャンパスツアー D・J	セレモニー B・F・I	報告書 G・H・K
カテゴリー2 【議論】	負けへん A・I・K	文化 F・G・J	地震 C・D・E	日本とトルコの助け合い B・H
カテゴリー3 【旅行】	京都FT C・F・G・J・K	白浜FT A・B・D・E・H・I	/	
カテゴリー4 【レク】	夏祭り A・E	書道 F・H・I	茶道 D・K	料理 B・C・G・H

※途中で辞退したL・Mを除く

20) Aは「予約の電話やメールの書き方など、国際交流だけでなく、人間として、大人として成長することもできるセミナーだと思いました」、Bは「“大人”としてのマナー(メールの書き方など)を指導していただけたのがよかったです」、Kは「自分たちでスケジュールを立て、レストランの予約をするなど、社会人になるための練習になる作業が多かった」と述べている。

21) 結果として、J「市川先生や松島さんは学生のやりたいことを尊重して下さり、私たちの意見をもとに予定を立てるようになってくださいました」、A「先生方はとても私たちの意見を尊重して下さり、全てを受け止めてくださいました」「先生は否定することをしないでくださったので、私たちも思ったことや考えたことを積極的に言うことができた」E「いつでも質問できる状況だったので、すごく何事においてもやりやすかったです」C「学生のことを一番に考えてくださった」G「すべてのプログラムを学生主体で準備・実行させることで、自立の気持ちが芽生えて良かった」I「学生の個々に対応していただき助かりました」といった肯定的なアンケート結果を得た。

事前準備合宿（5月16-17日）：ここでは、5月13日にブレイン・ストーミングを行ったものの中から、実際にどの企画をJATIS2015内で行うかが決定され、その担当の振り分け作業を行った。それぞれのカテゴリーごとにチームができ、各チームの初めてのグループワークが行われた（最終的な役割分担については表1参照のこと）。

第2回会合（5月20日）：ここでは、事前準備合宿で十分に議論できなかったグループワークの続きを行った。また、JATIS2015実施期間中のスケジュールを決定した。

第3回会合（5月27日）：ここでは、各グループの企画案を作るにあたって、企画書の書き方について指導した。英語で作成すること、実現可能性をきちんと調査すること、コストを把握すること、などの諸注意を行った。これに先立つ5月25日には、コジャエリ大学から参加学生リスト（男子4名・女子8名）が届き、本学参加学生の士気もいよいよ高まりを見せた。

### 3-4：困難への直面

本学参加学生が順調に準備を進めていた5月26日、コジャエリ大学から舞い込んだ一通のE-mailがJATIS2015最大の困難の契機となった。コジャエリ大学では、これまでJATISの窓口となってきた国際センター長P氏が退任し、Y氏が2014年11月からその任に当たっていた。JATISでは協定により、ホスト国は宿泊・食事・国内移動などの費用を負担し、ゲスト国は航空券代を負担することになっているのだが、5月26日のE-mailでY氏は、本学への航空券代補助について問い合わせてきた。担当職員は6月2日に協定とは異なる支出はできない旨をY氏に通知したが、彼はそのような条件があるとは知らなかった、また、時期的に別の資金を調達するのは難しいとの返信を寄せた。先方の引き継ぎの問題とは言え、この時期に、このような問題が噴出したのには、担当教職員とも大変驚いた。

本学学生は着々と英文での企画書を完成させていたが、状況が不透明であることから、第4回会合（6月3日）は理由を伏せて本学国際教育・協力センター（以下：CIEC）の都合により休講とした。この段階では、担当教職員は、コジャエリ大

学側が資金を調達する可能性が少しはあるとの希望も抱いていた。しかし、6月10日にY氏から資金調達が不調に終わったこと、さらには、今年のJATIS2015への参加を中止する旨の連絡が入った。この日（6月10日）は本学学生の第5回会合の日にあっており、二週連続で理由も告げずに休講にはできないとの配慮から、本学国際連携機構事務部長から参加学生へ、状況の説明を行った。しかし、ここではコジャエリ大学が中止を決定したことについては触れず、JATIS2015の実現が危ぶまれていることについて説明がなされた。部長退席後、参加学生からは担当教職員に向けて、どうしてもJATIS2015を実施したい、コジャエリ大学がダメなら他の大学を呼べないか、日本にいるトルコ人学生を集めてくれないか、といった意見が出た。本学参加学生たちは突然状況の急変を知らされ、動揺は隠しきれなかったものの、建設的に落ち着いて意見を述べていたのが印象的であった。

この日の学生の反応を受けて、CIECはコジャエリ大学側に、人数を4人に絞った上で一人当たり80000円の渡航費補助を行うので、渡航中止を再考願えないかという旨のE-mailを6月15日に送った。しかし、6月17日、その条件でもコジャエリ大学側は訪日しないとの通知があった。

これを受け、担当教職員はコジャエリ大学とのJATIS2015開催を諦め、近隣大学でトルコ人学生の受け入れを行っている研究者に可能性を探ってもらうこととした。学生は第6回会合（6月17日）、第7回会合（6月24日）と不安の中で企画書の内容の精査を担当教員から受けた。また本学参加学生は、いつトルコの他の大学がJATISに興味を示しても良いようにと、自主的にJATIS2015の内容を伝える英文10枚ほどの冊子も作成した。第8回会合（7月1日）には、英語討論能力の改善のためEUIJ関西が主催するEUディベート・クラブに参加した。失意と絶望のどん底に近い状態だったであろうが、それでも不慣れな英語ディベートに取り組む姿勢には好感が持てた。

吉報は少し遅れてやってきた。7月15日、MHU文理学部シェイマ研究室の井藤聖子氏の紹介で、同大学がJATIS2015に興味がある旨が伝えられた。

翌7月16日、CIECはセンター長名義でMHU人文・科学学部長宛に招聘文書を送った。実は井藤氏には、2014年12月10日、前年度のJATIS2014の準備期間中に、「トルコ入門」と題する講演会（本学産業研究所主催）を行っていた。このようなつながりが、今回の困難打破につながった。また、コジャエリ大学が訪日を取りやめてから（6月17日）、新しい大学を探すに至るまで（7月15日）ここまで長い時間を要した理由のひとつは、イスラーム暦のラマダーンであったことは、注記しておくべきであろう。2015年のラマダーンは6月18日から7月17日であり、この間、トルコ側大学との細かな折衝は、なかなか思うようには進まなかった。ともあれ、MHUの一行が訪日する見込みが高くなったことから、予定にはなかったが春学期期末試験後の7月28日に、本学参加学生に集まってもらい（第9回会合）、最終的な準備作業を行った。

昨年度のJATIS2014では、ISILの日本人質殺害事件により直前で渡航が中止となり、参加学生には大きな精神的負担を強いることとなったが、今年度のJATIS2015でも、一ヶ月余にわたり参加学生に不安定な時期を過ごさせてしまったことは、担当教員としては痛恨の極みである。しかし、JATIS2014運営の過程で、事態が急変した際に学生がどれほどの精神の動揺を経験するか、また、学生が大学や担当教職員に対してどれほど激しい叱責の言動を行うか、が経験として分かっていたことが、今回の事態を落ち着かせる上では重要な要因だった<sup>22)</sup>。

他方で、この事態において参加を辞退した学生が2名いた（L・M）ことも指摘すべきだ。一名は準備不足での国際交流セミナー参加に疑問を持ったこと、一名は親族の手術への付き添いが理由であったが、順調に推移していれば、参加したものと思われる。

### 3-5：セミナー開催期間

MHUの参加決定後、夏休み期間中にもかかわらず、本学参加学生は概して良く準備作業を行った。夏休み明けの8月24-25日には直前最終準備合宿を実施した。ここでは主に、指導が十分に行き届いていなかったプレゼンテーションについて指導する<sup>23)</sup>とともに、最終の予約作業、盆踊りの振り付けの練習、関西学院大学レジデンスIV（寮）の利用方法の確認、しおりの作成を行った。この頃には、MHUから引率者1名（女性）、学生3名（女子2名・男子1名）が参加することが分かっており、本学参加学生はできるだけトルコ側参加者の周りに日本人学生を均等に配置するよう、各企画の最終調整を行った。JATIS2015は2015年8月27日から9月5日までの間、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスを拠点に開催された。実際に学生が企画・運営したJATIS2015のプログラムは表2の通りである。

本稿では紙幅の関係でJATIS2015の各プログラムの内容については深く踏み込まないが、当セミナー開催期間中における本学参加学生の成長については、まとめておく必要がある。

第一に、10日間のセミナーを通じて、本学参加学生とトルコ側参加者が非常に強い友情を育んだことである。今年のトルコ側参加者は、引率者と学生1名は英語運用能力が高かったが、残りの学生2名はそうではなかった。とくに唯一のトルコ側男子学生は、セミナー開始直後は自ら声を発することなく、もっぱらスマートフォンの翻訳アプリを使ってトルコ語→英語を表示して日本人学生とコミュニケーションを取っていた。

しかし、プレゼンや議論、その他の時間を通じて、英語が流暢でないトルコ側学生も本学参加学生と、時にカタコトの英語で、時にジェスチャーや表情<sup>24)</sup>で、時に動画や画像を見せ合ったり、時に翻訳アプリを利用したりと、必死にコミュニケーションを取り始めた。本学参加学生も、英語運用

22) それでもJはアンケートで「コジャエリ大学が日本に来ないと言い出したとき、国際センターの対応が遅かった（中略）緊急会議を開くなど、対応して欲しかった」と述べ、学生と事務方の時間感覚のギャップが浮き彫りとなった。

23) Jは「（プレゼンを）何度も練習し、本番ではスクリーンや観客を見ながら話すことができました」、Fは「プレゼンのリハーサルの際、たくさんアドバイスをいただけたことが嬉しかった」、Dは「プレゼンやディスカッション時には的確なアドバイスを与えてくださった」と述べている。

表2：JATIS 2015 プログラム

<p style="text-align: center;"><b>8/27 (木)</b></p> <p>21:50 トルコ側参加者、寮に到着 22:00 寮の利用法についてのガイダンス</p>	<p style="text-align: center;"><b>9/1 (火)</b></p> <p>串本・白浜・大阪フィールド・トリップ（続き） コナモンミュージアム、心齋橋散策、大阪城観光、串揚げ体験など</p>
<p style="text-align: center;"><b>8/28 (金)</b></p> <p>9:00- キャンパスツアー／アイスブレイク 13:00- プレゼン&amp;議論『負けへん』 18:00- ウェルカム・セレモニー</p>	<p style="text-align: center;"><b>9/2 (水)</b></p> <p>9:00- フリータイム 13:00- ビンゴ大会 14:00- 茶道体験 17:00- 夏祭り</p>
<p style="text-align: center;"><b>8/29 (土)</b></p> <p>9:00- 買い物@スーパーマーケット 10:00- トルコと日本の料理体験 16:00- トルコ側引率者による講演「Turkish Culture and Society」 17:30- トルコ側の時間（トルコの結婚式）</p>	<p style="text-align: center;"><b>9/3 (木)</b></p> <p>京都フィールド・トリップ 八坂神社・清水寺・食べ歩き・伏見稲荷大社・日本料理体験など</p>
<p style="text-align: center;"><b>8/30 (日)</b></p> <p>9:00- プレゼン&amp;議論『文化』 13:00- 書道・折り紙体験 17:00- オプショナル・ツアー（神戸）</p>	<p style="text-align: center;"><b>9/4 (金)</b></p> <p>9:00- プレゼン『地震』 10:15- HAT 神戸（人と防災未来センター視察） 13:00-15:00 議論『地震』 17:00- インフォーマル・フェアウェル・セレモニー</p>
<p style="text-align: center;"><b>8/31 (月)</b></p> <p>串本・白浜・大阪フィールド・トリップ 串本トルコ記念館・白浜フィッシャーマンズワーフ・スイカ割りなど 白浜シーサイドホテル泊</p>	<p style="text-align: center;"><b>9/5 (土)</b></p> <p>9:00- プレゼン&amp;議論『助け合い』 13:00- フォーマル・フェアウェル・セレモニー 18:40 阪急西宮北口駅開空行きリムジンバス・ターミナルにて見送り</p>

能力が比較的高い学生は2-3人しかおらず、その意味ではトルコ側には大変な迷惑をかけたかもしれない。しかし、本学参加学生も流暢とは言えない英語で必死にコミュニケーションを取ろうとし、トルコ側参加者もそれを必死に理解しようとしていたのが印象的であった<sup>25)</sup>。

第二に、本学参加学生が、セミナーを通じて、イスラームに対する理解を深めようという意識が強くなっていったことである。上述したとおり、今回はコジャエリ大学の訪日中止による混乱もあり、6-7月の準備過程で十分にイスラーム対応についての指導が行き届かなかった。それゆえ、8月29日の日本とトルコの料理体験では料理酒を使ってしまい、トルコ側参加者が日本料理を一部

食べられないなどの事態も生じた。しかし、トルコ側参加者に、何が食べられて、何が食べられないか、その理由は何か、などとコミュニケーションをとるうちに、9月1日の串揚げ体験、9月3日の京都での日本料理体験では、トルコ側参加者が食べられるものだけを本学学生からレストランに求めるなど、日に日に、イスラーム対応を本学学生が身につけていった。また、本来は、神戸ハーバーランド近郊での観光を予定していた8月30日のオプショナル・ツアーについても、トルコ側参加者が神戸ムスリムモスクを訪問したい旨を本学学生に伝えると、本学学生がトルコ側参加者を引率し、モスクでの礼拝の様子を見学させってもらうなど、相手の宗教・文化を尊重し、ホスピタリティ

24) Jは「文化や価値観が違ってても、ジェスチャーや表情などでコミュニケーションはとれる」、Kは「違う文化を持つ人々とともに生活する中で、互いの文化を伝え合うことや、文化を体験し、尊重し合うことの喜びを感じた」と述べている。

25) E「英語が理解できなくとも仲良くなれるし、思い出も共有できる。相手を見ておくことの大切さを知りました」、C「言葉が通じる通じない、英語ができるできないよりも、話をする、相手を理解することが大切だと学んだ」、G「すべての事柄においてお互いの理解・受容が最も大切だと思う」、D「コミュニケーションを図るということは（中略）やる気と熱意、そしてどれだけ相手とコミュニケーションを図りたいか、という気持ちではないか」といったような感想は、今回のセミナーが彼らにとって重要だったことを物語る。



をもって接することができるようになっていった<sup>26)</sup>。

第三に、本学参加学生の中に、日頃から日本の政治・文化・経済について貪欲に学ばなければならない、という気持ちが芽生えてきたことである<sup>27)</sup>。プレゼンや議論の時間を通して、また、寮での共同生活を通じて、本学参加学生とトルコ側参加者がコミュニケーションを深めれば深めるほど、本学参加学生は日本のことを十分に知らない自分に気づいていった。例えば、8月29日にはトルコ側引率者による「Turkish Culture and Society」という講演会があり、その中で、トルコにおける2013年のデモについての説明があった。くしくもその翌日の8月30日、日本でも東京（国会議事堂前）を中心として、いわゆる安保法案に反対する大規模デモが生じた。この様子を、SNSを通じて知ったトルコ側参加者から、多くの質問が本学参加学生に向けられたが、その際上手に説明ができなかったことが、本学参加学生にとって鮮明な記憶として残ったのかもしれない<sup>28)</sup>。また、『文化』のプレゼンで本学参加学生は毎月の日本の伝統行事を紹介したが、その後の議論の時間に、なぜおせち料理を食べるのか、などの質問に対して、十分な回答ができなかったことも、このような反省につながったのかもしれない。

### 3-6：セミナー後の状況

セミナー開催後、本学における事務的な最大の残務は報告書の作成であった。この業務は骨の折れる作業であったが、担当学生の努力により締切日である9月10日までには入稿された。トルコ側引率者とはその後、数通のE-mailでのやりとりがあった。

MHUは新しい大学であり、本学の協定締結のパートナーになりうるかどうかは、今後本学担当部署が検討するものと思われるが、MHUからは来年日本人学生をホストしたい旨のお話もいただいた。JATIS2015はコジャエリ大学訪日中止による危機に直面したが、他方で、新たにMHUとの

友好関係が始まったことは、担当教員として喜ばしく感じている。トルコの大学は、「組織対組織」の安定的な協力関係に至るまでに、「人対人」の信頼関係の構築と継続が大きな課題となる<sup>29)</sup>。その意味では、今回のJATIS2015の運営に尽力してきた担当職員が引き続き窓口となって「組織対組織」への協力関係へと昇華させていくことが望まれる。

## 4：トルコ交流セミナーと学生の国際化

本節では参加学生の視点から、JATIS2015について定量的分析を試みる。分析するデータはプログラム前後に実施した学生アンケートである。今回のプログラムに参加した学生の平均年齢は18.7歳（min.=18, max.=21, SD=.947）、年齢と性別で区分した時にも女子学生に偏りがあると確認できる（ $\chi^2 = .923$ , df=3, sig.=.819）。しかし、今回のプログラムでは海外の学生との交流からどのように国際化の意識を変化させたかも、大学が行う国際化のプログラムの役割の一つに含められる。そこで、参加者の回答に基づきながら、大学生がより海外へ踏み出す鍵となる要素を、プログラム前後の国際化の意識、大学の国際化、プログラム内容への参加と満足度の関係の視点から、考察する。

### 4-1：国際化の意識：プログラム開始前

まず、回答者である学生に「自分が国際的であると思うか」と問うと、11名の回答では平均値3.27（SD=.647）であった。この数値は、いわゆる「ふつう」の大学生、である。こうした自己の経験・記憶による国際化の意識の関係とは別に、これまであるいは現在の外部環境をどう評価しているのであろうか。13名の回答では外部や他者に対して厳しい結果になっている。国際化の状況の評価は国（M.=2.08, SD=.954）、現在の居住地もしくは生育地（M.=2.00, SD=.816）をはじめ、政治（M.=2.62, SD=.961）、経済（M.=2.23, SD=.961）、政府・行政（M.=2.46, SD=1.127）、これまで受けてきた教育（M.=2.38, SD=1.193）よりも、通う大学

26) Jは「相手を知ろう、理解しようとする気持ちが大切だと、次第に気づきました」と述べている。

27) Aは「このセミナーで自分の知識の少なさを実感しました」と述べている。

28) Hは「日本の行政・政治システムや文化・慣習、政治についてもっと知り、他人とこのようなトピックで会話したいと思いました」と述べている。

29) 市川ほか（2015）、p.53.

( $M=4.38, SD=.768$ )、その学生 ( $M=3.54, SD=.877$ ) が国際化していると感じている。さらに回答を整理すると、回答者たちは「近い将来日本は多民族国家になる」( $M=2.77, SD=.832$ ) ことや「国際化が日本人としてのアイデンティティを失わせる」( $M=2.77, SD=.832$ ) ことについて、どちらかといえば否定的な印象をもち、国際化が進むと犯罪(率)が高くなる可能性については肯定気味だ( $M=3.15, SD=1.068$ )。

こうした回答者自らの国際化感覚が他のどんな感覚と相関をするかを、適切に回答した9名のデータからチェックした。その結果、アルバイトによる月収が高く ( $r=.711, p=.014$ )、「近い将来日本が多民族国家になる」ことには否定的 ( $r=-.650, p=.030$ ) であることに加えて、自国の情報発信には、政治 ( $r=.750, p=.020$ )、選挙 ( $r=.711, p=.032$ )、社会 ( $r=.750, p=.020$ )、刑罰 ( $r=.825, p=.006$ ) において、正の相関が確認できた。さらに、2回目のアンケート結果の中の質問項目のうち、プログラム後に自分への評価を尋ねた中の「指導力のなさ」にも、相関があった ( $r=.704, p=.034$ )。これらは、回答者が学生として裕福であり、国のかたちが継続することを見込み、社会システムに関する情報発信の積極性を感じ、プログラム後には自らの指導力不足を認識しやすかった学生ほど、国際化に関する自意識が高いというイメージが提供される。他方、語学試験の成績 ( $r=-.257, p=.445$ )、外国人の友人数 ( $r=.514, p=.106$ )、その割合 ( $r=.346, p=.298$ )、年齢 ( $r=.243, p=.471$ )、パスポート取得年齢 ( $r=-.174, p=.608$ )、海外旅行の回数 ( $r=-.071, p=.835$ ) との関連性はなかった。ゆえに、試験という業績や海外旅行などの家庭の経済環境と、個人の国際化の意識は、11名の参加者の中では無関係であるという意識を有しているようだ。

#### 4-2: 大学の国際化

大学の国際化の取組についての回答では、選択肢への賛否を示す数値のばらつきに気が付く。外国語による専門教育の導入・拡充が平均値では最高点 4.15 ( $SD=.689$ ) を記録した。次に、第2外国語の履修を必須化 ( $SD=1.354$ )、「飛び級」の増加と留学期間についても平均4という評価が与えられた ( $SD=1.354$ )。しかし、その評価の幅を示

す標準偏差 (Standard Deviation: SD) には、違いがあるため、表面上同評価であっても、その態度は微妙に異なることが理解できる。

抵抗感を示す回答として、大学卒業時の統一試験実施の義務化 ( $M=2.77, SD=1.235$ )、全学(学内)のすべての連絡の外国語化 ( $M=2.77, SD=1.363$ ) があげられる。語学成績を軸にした学費変動 ( $M=3.23, SD=1.363$ )、語学成績の厳格化 ( $M=3.31, SD=.947$ )、(追加)海外プログラム ( $M=2.92, SD=1.188$ ) など強制的に国際化を促進させるプログラムの導入には賛成していない。さらに、外国語による専門教育の導入・拡充に対する評価とは対照的に、語学成績に関連づけた学費変動 ( $M=3.23, SD=1.363$ )、単位数で(基本的費用を加え)授業料決定 ( $M=2.46, SD=1.266$ )、科目拡充のための教員確保と授業料上昇 ( $M=2.38, SD=1.193$ ) については、評価回答の幅以上に、自己責任としての成績と大学が準備するソフト面の充実には否定的な態度が目立つ。大学側の努力とは別にして、この点は教育の受益者(権利)より消費者としての主張が強くあらわれていそうだ。

項目間の関係を相関係数から参照した時、有意な組み合わせはあるものの、全体的な解釈が難しい。そのため、回答の内容を加味して、その特徴に近づくため、主成分分析の結果を表3に示す。成分3・4は十分に変数を要約できていないと見なされるため、成分1・2に限って言及する。成分1の変数は、語学教育の厳格化と括れる。先の基礎統計ではコストの上昇が見込まれる点については否定的な態度がうかがわれたものの、全体としてこの点は、マイナスに働くほどの関係性を示さないようだ。対照的に、成分2では、マイナスの符号が科目拡充のための教員確保と授業料上昇、「飛び級」の増加と留学期間にある。成分を構成する他の変数が、海外留学への促進に肯定的であると理解できるのに対して、マイナスをつける変数は在学期間全体の学費上昇を危惧する側面と理解できる。この質問がプログラム開始直後に提示された点を踏まえると、海外への留学、学内の語学教育の厳格化を望む一方で、その充実に伴う経済的コストは回避したいという希望が読み取れる。このプログラムの参加者には、教育プログラムのコ

表 3：国際化のための大学の取組に関する主成分分析

	1	2	3	4
語学成績（≠単位数）による進級・卒業の重視	0.876	0.055	-0.359	-0.102
語学教育の成績厳格化	0.855	-0.243	-0.268	0.253
語学教育の必須取得単位数の増加	0.830	-0.013	-0.057	-0.260
語学成績（≠単位数）による学費変動	0.816	0.169	0.255	0.084
科目拡充のための教員確保と授業料上昇	0.725	-0.548	0.062	-0.187
1、2年生向け一般教育科目成績厳格化	0.713	-0.094	-0.478	-0.132
1、2年生向け一般教育科目取得単位数増加	0.710	0.159	-0.371	-0.347
全学（学内）、全連絡の外国語化	0.630	-0.209	0.600	-0.163
大学卒業時の統一試験実施の義務化	0.603	0.195	-0.244	0.684
単位数で（基本的費用に加え）授業料決定	0.553	-0.390	0.328	0.458
海外プログラムの必須化	0.539	0.739	0.235	-0.102
語学の点数や評価と海外追加プログラム 「飛び級」の増加と留学期間	0.459	-0.786	0.333	-0.116
第2外国語の履修の必須化	0.321	0.636	0.283	-0.196
抽出後の負荷量平方和				
合計	6.417	2.619	1.484	1.119
分散の%	45.838	18.706	10.601	7.991
累積%	45.838	64.544	75.145	83.136

ストパフォーマンス向上を期待する気持ちが、強いとの解釈が導かれる。

4-3：各プログラムに関する満足度と積極度

表4でわかるように、JATIS2015の各プログラムの満足度は概ね平均値4以上を記録した。P&D（プレゼン&議論）「負けへん」、トルコの結婚式が満点に対して、P&D「助け合い」、インフォーマル・フェアウェル・セレモニー（IFS）には低評価を下した学生もいたため、ばらつき度合を示すSDが大きくなっている。

積極的な参加については、より個人的評価が分かれた。プログラム初期に行われたキャンパスツアー（CT）、ウェルカム・セレモニー（WS）に積極的に参加をできなかった学生がいること、全体の数値は高いが大阪と京都旅行に不満を抱く学生もいたようだ。満足度と積極度の数値で有意な差がキャンパスツアー、P&D「負けへん」、講演会、京都旅行である。次のレベルで差が確認されそうなプログラムは、ウェルカム・セレモニー、トルコの結婚式である。これらの差異のあるセットの共通点は、数値上満足度より積極度が下がる点である。P&D「助け合い」を除き、この傾向は他の項目でも見られるため、企画担当学生の評価が低めに表れやすい点、有意差がプログラム序盤に表れている点を考慮すると、相手国の学生と自らの

距離感をつかめない時期にこうした傾向が出やすいかもしれない。

キャンパスツアー（ $r=.633, p=.036$ ）、P&D「文化」（ $r=.810, p=.003$ ）、大阪旅行（ $r=.702, p=.016$ ）、インフォーマル・フェアウェル・セレモニー（IFS,  $r=.815, p=.002$ ）については、満足度と積極度の相関係数が有意と見なせるため、企画担当学生のみならず、他の参加者たちも一定の関

表 4：各プログラムに関する満足度と積極度

	満足度		積極度	
	M	SD	M	SD
CT**	4.73	.467	3.82	1.168
WS*	4.64	.674	3.73	1.348
P&D「負けへん」**	5.00	0.000	4.45	.522
P&D「文化」	4.73	.467	4.64	.505
P&D「助け合い」	4.00	1.612	4.55	.820
P&D「地震」	4.73	.467	4.55	.820
クッキング	4.82	.405	4.73	.467
講演会**	4.91	.302	4.36	.809
トルコの結婚式*	5.00	0.000	4.55	.688
書道・折り紙	4.64	.674	4.55	.688
神戸旅行	4.64	.674	4.36	.809
串本・大阪旅行	4.55	.688	4.27	.905
京都旅行**	4.91	.302	4.27	.905
夏祭り	4.91	.302	4.64	.505
IFS	4.64	.924	4.55	.688
FS	4.91	.302	4.73	.467

\*\*：p<0.05, \*：p<0.1

連性を得られたことになる<sup>30)</sup>。

それら以外のプログラムには何らかの改善点、不満を抱く可能性を、この結果は暗示している。学生に積極的になれなかった点を自由記述で回答させたところ、体調以外に、コミュニケーションがうまく取れなかったこと、手伝えることがなく手持無沙汰であったこと、予定を事前に告げられずに担当者続に続くだけであったこと、人任せであったことなどが記された。それゆえ、外国人とのコミュニケーションに関する個人的能力とは別に、運営上、どのように企画担当学生以外の参加者のモチベーションを維持できるか、また進行中であってもそれに配慮できる仕組み作りが、積極性の維持では課題となる。

#### 4-4：プログラムの満足度

プログラム自体の満足度に関して、全体としては、回答者全員が満足にマークを記した。

個人、大学（側）、国の視点を加えた満足度や評価の回答状況（表5-A）から、受講者間の関係構築、日本・トルコの2国間の草の根交流への貢献については、満足度が一致する結果であった。担当教職員への評価、成果に対する学生自身の評価、国際化、トルコ人との交流に通じる選択肢では高い満足度を記録できたようだ。

表5-Bから、主成分1には個人的成長への満足度が多く含まれる。一方で、大学の「国際化」への貢献が自覚できるレベルと参加者は自己評価を与えている。他方、運営者側の配慮、対応を加味した時には、自己の現状や今後の生活、他国の理解に関する知識、理解を深める点で成長できたという認識が読み取られる。もちろん、第2成分としてあらわれるように、国際交流プログラムでは学生が判断できない事項、手続きも含まれるため、学生たちは助言や指示を請った場合の教職員の対応に好評価をもっていた。そして、プログラム運営の中では、学生たちはこれまでに接しなかった手法、スキルの有用性も感知できた。この点は第3成分によって示されたところである。

プログラムを通じて「より国際的になった」という自覚は、総じて高まったといえる（M = 4.45,

表5-A：プログラムの満足度の状況

	M	SD
教員・事務職員の対応	4.73	.467
学生の自主性の尊重	4.64	.924
要求された課題の適正さ	4.91	.302
教員の（準備）対応	4.64	.924
受講者間の関係構築	5.00	0.000
新しい知識や技能の修得	4.91	.302
物事や視点のひろがり	4.91	.302
あなたのアウトプットの充実度	4.73	.467
今後の友人・知人関係の拡大可能性	4.90	.316
あなたの進路への参考	4.20	1.135
自分の「国際化」への貢献	4.70	.675
大学の「国際化」への貢献	4.80	.422
（日・ト間）草の根交流への貢献	5.00	0.000
トルコという国への理解	4.60	.516

表5-B：満足度に関する主成分分析

	1	2	3
自分の「国際化」への貢献	0.992	0.007	0.004
大学の「国際化」への貢献	0.922	-0.175	0.292
要求された課題の適正さ	0.887	0.248	-0.381
物事や視点のひろがり	0.887	0.248	-0.381
あなたの進路への参考	0.858	0.042	0.193
学生の自主性の尊重	0.811	0.345	-0.399
あなたのアウトプットの充実度	0.744	-0.351	0.165
教員・事務職員の対応	-0.292	0.811	0.347
教員の（準備）対応	-0.255	0.749	0.342
新しい知識や技能の修得	0.342	-0.481	0.771
トルコという国への理解	0.593	0.426	0.610
<b>抽出後の負荷量平方和</b>			
合計	5.975	2.028	1.802
分散の%	54.317	18.437	16.386
累積%	54.317	72.754	89.14

SD=.522)。1回目のアンケートで尋ねた「自分が国際的であると思う」の平均値が3.27であったことをふまえ、2回ともに回答した11名のデータにWilcoxonの符号付き順位検定を加えると1回目と2回目の国際化の意識には差がありそうなのである（Z=-2.588, p=.010）。また、5%有意水準で区切ったSpearmanの相関係数を用いる時、この自己認識とリンクしやすい項目を2回目のアンケート結果のデータから考察してみよう。1回目のアンケートで回答した国際化の自意識と今回の回答の間に相関関係はみられない。再度国際化の定義として尋ねた質問項目では、外国人居住者割合

30) 大阪旅行を不満のあるプログラムとして4名があげた。

( $r=.677, p=.022$ )、外国人の地方参政権 ( $r=.671, p=.024$ )、大学としての国際化の取組として飛び級を増やし、その期間を留学に充てられること ( $r=.618, p=.043$ ) があげられる。家庭内では親・保護者とあまり話さず ( $r=-.805, p=.003$ )、幼い時に親・保護者の「生活に関する躰」は厳しいと感じなかったようだ ( $r=-.625, p=.040$ )。また、海外プログラムに参加する時は「あなたの進路への参考 ( $r=.618, p=.043$ )」のみ、国際的な自己評価の向上との正の関係がある状況であった。単純に言えば、この関係はプログラムを通じて国際的になったとの感覚が高いほど、卒業後の方向や希望について意識する、プログラムの体験内容から考える可能性が高まるという傾向を説明する。

#### 4-5：小括

これまでの結果を踏まえ、JATIS2015には学生の国際化について正の効果があることが分かった。とかく国際セミナーは安全性を重視するあまり、学生を過保護に扱いがちである。しかし、20歳前後の若者が海外とのコンタクト自体の楽しさや難しさを知るためには、日本人としての知識や「常識」の修得に加え、臨機応変さと責任感を発揮させる幾分過酷ともいえる場面設定、適宜自己評価・自省する機会の設定が重要であると思われる。同時に、そうした内容設定や運営は、学生の意識変化にプラスの効果をもたらしやすい点も、このプログラムから得られた大きな教訓の一つである。国際理解教育では国・文化ごとの特異性と共通性の確認も重視されることを思い出すと、今回のプログラムは、相手国との違いのみを見つけようとした学生に日本人のとして共通性、「絆」を感じさせたようにみえる。もちろん、国際化にとって座学が教育上軽視されてはならない。むしろ、今回の回答の分析から、国際化の芽や肥料となるように日常の講義を設定したり、今回のような国内プログラムの継続的に提供したりすることで、回り道かもしれないが、学生の国際化のすそ野を広げ

ることが可能となるだろう。

#### 5：結語

以上、定性・定量の両側面から JATIS2015 における大学間国際交流の意義と課題を検討してきた。本稿では、1 において国際理解教育の本質が「態度化」であることを指摘し、国際プログラムの経験をもとに、あるべき社会の発展に向けて自らの価値観を変革し、社会に主体的にかかわってこうとする行動が取れるようになることが重要であるとした。そして、国際プログラムの参加学生は、自己成長・自己発見・自信の獲得といった内的変化と、社会人として必要な実務能力の獲得といった外的変化を経験することが望まれた。

これに即して述べれば、以下のようなことが指摘できよう。

内的変化としては、定性分析から、日本人参加学生がトルコ人参加学生との強い友情を育み、コミュニケーションを行うことを強く望み、イスラームに対する理解を深めようとしたことが明らかになっている。また、次の国際プログラムへの応募の検討を始めた学生もいる<sup>31)</sup>。さらには、海外に伝えるべき日本についての知識を貪欲に知ろうとする態度も見られた<sup>32)</sup>。定量分析における当プログラムへの満足度や参加学生が「より国際的になった」とのデータ(4.4)も加味すれば、参加学生に一定の内的変化が生じたと判断してよい。また、外的変化としては、アンケートの自由記述欄(注20)および定量分析(表5-B)から、これまでにあまり接することのなかった、メールの書き方や予約の仕方、さらには社会における大人としてのマナーといった、社会的スキルの獲得を実感しており、参加学生に一定の外的変化が生じたと判断してよい。

しかし、これが十分に「態度化」に結びついた(もしくは、結びつく)かどうかは、今後の精査が必要となるだろう。筆者らが気になるのは、学生

31) E「今まであまり学校の国際交流プログラムに参加してこなかったので、これからは参加しようと思いました」D「こういった国際交流プログラムを増やすこと」「国際交流はこれほど楽しいものなのだと驚いた。これから学生の内になるべく多くの国際交流プログラムに参加したいと心の底から思った」がその例。

32) I「今後はさらに、このような国際プログラムに参加していき、日本のよさを世界の人に伝えていけるように努力したいです」がその例。

の「消費者化」である。定量分析（4-2）では、学生の学習への態度が消費者的であり、「海外への留学、学内の語学教育の厳格化を望む一方で、その充実に伴う経済的コストは回避したいという希望が読み取れ（中略）教育プログラムのコストパフォーマンス向上を期待する気持ち（中略）が強くある」ことを示した。プログラム準備期間中も参加学生の一部から、「（参加費として）8万円も払っているのだから、これくらいのことはしてもらわないと…」というコメントを耳にすることもあった。国際理解教育は、多様な文化や価値観・生き方をもった人々と共生できる人材、そしてそのような社会を創造することのできる人材を育てる実践活動である。自らと異なる文化や価値観をもつ人々と接する機会を、学生個人の効用最大化のための手段のみに還元することのないよう、今後指導に工夫をする必要がある。

#### 参考文献

- 青木一・竹内裕一(2011)「国際理解教育における態度化に関する実証的研究—千葉市犢橋中学校「国際理解教育プロジェクト」(1996年)に取り組んだ卒業生への追跡調査を通して—」『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻 pp.117-127。
- 市川顕・山本竜大・中村圭(2016)「トルコ交流セミナーの意義と役割に関する研究—渡航中止となったJATIS2015-16における学生の国際認識の変化に着目して—」『関西学院大学高等教育研究』第6号頁未定。
- 市川顕・山本竜大・中村圭(2015)「JATIS2013-14に基づく大学間国際交流の意義と課題」『産研論集』第42号 pp.45-57。
- 稲葉みどり(2012)「愛知教育大学におけるグローバル人材の育成の取り組み—タイからの招聘研究者を人的資源として—」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』第2号 pp.19-27。
- 植木節子(2013)「“国際理解教育”の影響と国際感覚育成に関する考察」『千葉大学教育学部研究紀要』第61巻 pp.193-201。
- 関西学院大学国際教育・協力センター(2015)『トルコ交流セミナー2015』関西学院大学国際教育・協力センター。
- 坂本利子・吉田信介・宇根谷孝子・本田明子・片山智子・和田綾子(2006)「立命館大学と立命館アジア太平洋大学間の日英語クラス遠隔交流授業」『立命館高等教育研究』第6号 pp.1-16。
- 田所真生子・渡部留美(2013)「名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラムの試み」『名古屋大学留学生センター紀要』第11号 pp.5-13。
- 中野渉・石川希美・松田奏保・小野真嗣(2008)「苫小牧高専における国際化推進プログラムについて」『工学教育』第56巻第5号 pp.31-35。
- 藤原正光・中林忠輔・手嶋将博(2011)「国際理解教育に関する比較研究（日本とマレーシア）～日本の大学生の意識調査～」『教育研究所紀要』第20号 pp.47-56。
- 細谷美代子・岡田昌章・三好茂樹・大塚和彦・荒木勉・須藤正彦・P.M. エドモント(2003)「2003年日中国際交流プログラム活動報告」『筑波技術短期大学テクノレポート』第10巻第2号 pp.135-141。
- 森克徳・西村克彦・松田健二・池野進(2013)「国際学術交流の活性化について—富山大学工学部材料機能工学科の場合—」『まてりあ』第52巻第10号 pp.491-492。